新田次郎全集

第八巻

栄光の岩壁

栄光の岩壁

新田次郎全集 8

新潮社版

栄光の岩壁
新田次郎全集第八巻
昭和五十年十一月二十五日発行
昭和五十二年十月十日五刷
定価一二〇〇円
著者 新田次郎
発行者 佐藤亮一
発行所 新潮社
東京都新宿区矢来町七一 〒162 振替東京四-八〇八
電話 業務部03(266)五一一一 編集部(266)五四一一
印刷 株式会社金羊社
製本 神田 加藤製本

© Jiro Nitta, 1975, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

栄光の岩壁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

栄光の岩壁

第一章　傷ついた戦後派

1

竹井岳彦は六人の男ばかりの兄弟の中の五男である。兄弟達の名は一郎、次郎、三郎、四郎、そして弟は六郎と名づけられているのに、彼は五郎ではなく岳彦と命名された。岳彦が出生した日、彼の父竹井玄蔵は穂高岳の頂上にいたから、そういう名を彼につけたのである。岳彦は早生児だった。とても、こんな小さい子は育つまいと病院でも言っていたし、彼の両親も、なかばあきらめていたのだが、岳彦は哺育器の中で生きつづけていた。昭和六年の夏であった。

「驚いたね、あの子は。まるで猿の早生児のようだ」

と担当の医者が言った。実は、その医者は猿の早生児がどれほどの生命力があるものか、実験したことはなかった。哺育器の中ですやすや眠っている岳彦の顔が、あまりにも、猿に似ていたから猿の早生児と言ったまでのことである。それを聞いて、看護婦が笑った。それからは哺育器につけてある名札の竹井岳彦とは呼ばず、オサルサンと呼んだ。それが奇妙に人の心を牽いた。オサルサンは医者達にも、看護婦達にも特別に待遇され、よく手の届いたもてなしを受けた。岳彦が無事病院を出て家へ帰ると、兄達が次々と彼の顔を覗きこんで、

「上野の動物園のオサルサンの赤ちゃん見たようだね」

と言った。やはり、岳彦が猿に似ていたことは否めない事実であった。だが、兄達は病院の医者や看護婦達のように、彼のことを、オサルサンとは言わず、岳彦のかわりにサルヒコと呼んだ。

「お母さん、サルヒコが泣いてるよ」

と兄達が母の菊子に知らせると、菊子は、

「どうしたのかしら、サルヒコには、さっきおっぱいをやったばかりなのに」

と、うっかりサルヒコという名を言ってしまう始末であった。

岳彦はよく泣き、よく眠り、そしてよく乳を飲んで成長していった。

幼稚園に行くようになってから、岳彦は岳彦という名が

本当の名前でサルヒコは彼の家での愛称であることを知ったが、そのころは近所でも岳彦と呼ばず、サルヒコちゃんと呼ぶようになっていたから、幼稚園の先生が岳彦ちゃんなどと呼ぶとむしろびっくりしたような顔をした。幼稚園の園児も先生も間もなく、彼のサルヒコという名の由来を知って、サルヒコちゃんと呼ぶようになった。

幼稚園に入った岳彦は、餓鬼大将になった。しょっちゅう喧嘩をした。喧嘩の相手が、なんだサル、動物園のサル、といったような呼び方をすると岳彦はひどく怒った。ほんものの猿が怒ったときとそっくりな顔をして相手につかみかかった。おれはサルヒコだ、サルではないぞと言った。

小学校一年生のとき、彼は兄達に教えられた漢字を得意になって書いて見せた。竹井猿彦の四字であった。彼はその字をノートや教科書の裏にやたらに書いた。

小学校の三年生になって、受持ちの先生が変った。師範学校を出てきたばかりの先生は、岳彦に正しい名前を書くように命じた。彼の友達たちにも、サルヒコと呼ばずタケヒコと呼ぶように申しわたしたが、岳彦は、

「ぼくはサルヒコの方がいいんです」

と言い張った。

「なぜサルヒコの方がいいのかね。先生はタケヒコの方がずっといい名前だと思うがね」

先生は首をかしげながら言った。

「先生、サルタヒコノカミって知っているでしょう。サルタヒコノカミはとってもつよい神様だった。だからサルヒコの方がいいや」

先生は困ったような顔をして岳彦の顔を見ていたが、やがてゆっくりと、遠い遠い昔のお話を始めたのである。

「天孫、ニニギノミコトがタカマガハラから日向の国高千穂に降りてこられるときに、道案内をした神様が猿田彦神である。猿田彦神は身の丈七尋というから四十二尺、鼻の長さ七咫（咫は古代の尺度の単位、親指と中指とを開いた長さで約六寸）というから四尺あまりもあって、眼は鏡のように光っていた。とても人間とは思われないような神様だった。戦の神様ではなく、道案内の神様、つまり先導者ということになる。君達はまだ山へ行ったことはないから知らないけれど、山へ行くときに先頭に立つ人のことをリーダーという。猿田彦神はリーダーだったわけだな」

「先生、やっぱり猿田彦神はえらかったじゃないか」

岳彦は先生が話を終るのを待って言った。

「えらいといえば、えらいことになるかな」

「えらいさ、リーダーだもの。ぼくんちの一郎兄さんだってリーダーだ」

「ほう、リーダーか」

先生が首を長くして聞くと、
「リーダーだとも、大学の山岳部のリーダーだ」
「それはえらいな」
「えらいでしょう、先生。だからぼくはサルヒコでいいんだ」
そのあたりに子供らしい飛躍があった。先生は負けた。好きなようにさせて置くしかないと思った。
岳彦は、その日から猿彦の名を先生の公認を得たかのような大きな顔をして使った。宿題の紙にも試験の用紙にも竹井猿彦と書いた。
岳彦は生れたときはたしかに猿に似ていたが、小学校に入ったころには、もう猿には似ていなかった。彼の兄達と似てどちらかというと丸顔の子供らしい顔をした少年だったが、眼つきだけが、猿に似ていた。常に眼を光らせながら、あたりを睥睨している、ボスザルの眼にどこか似ていた。闘争心をそのまま眼に集めていて、その眼を見詰めるものには、誰彼となく噛みついていこうとする喧嘩猿の眼であった。
岳彦は、学校を戦いの場と心得ているようであった。彼が大将でその下には中将も少将も大佐も中佐もいた。兵卒はひとりもいなかった。地雷というおかしな階級をつけられた家来がいた。軍人メンコの名をそのまま彼の家来につけたのである。軍人メンコには元帥があったが、岳彦も元帥と僭称するのはいささか気が引けたようであった。
「おい少尉、おれのカバンを持っていけ」
岳彦は彼の家来のひとりにそんな役を命じることもあった。中尉を斥候に出すこともあった。敵——多くは上級生だったが、それを発見すると奇襲攻撃を掛けた。岳彦は、常に先頭に立った。彼のもっとも得意とする武器は爪で引掻くことであった。爪を強くするために、赤土で磨いて、爪と肉の間にわざと泥を入れておいた。そうすると爪が偉力を発揮すると思いこんでいた。
「それサルが来たぞ」
敵はサルの爪をおそれた。岳彦にとびつかれて眉間から鼻筋にかけて、引掻き疵をこしらえた子が一人や二人ではなかった。岳彦の存在が学校の問題になった。岳彦に引掻かれた子の親が、ああいう危険な子は感化院に送ってくれと学校に文句を言って来たのである。
岳彦の母は学校に呼ばれて、もう少しなんとかならないものかという注意を受けた。四年生になって間もなくのことであった。菊子は、ただ謝るしかなかった。肩身の狭い思いで校門を出ると、うなだれたまま学校の前の坂道を登っていった。
その母の姿を岳彦は学校を一望のもとに見おろせる松の

木の枝にまたがって眺めていた。母がしょんぼりして学校から帰って来るのは、きっと自分のことで叱られたに違いないと思った。母が校門を出て、しばらくして、一つとし上の島村の父親が校門を出たから、多分、島村の父親が岳彦のことを校長先生に言いつけ、それで岳彦の母が呼ばれたのだろうと思った。

「島村がどこにいるか探して来い」

岳彦は松の木の上で、おごそかに家来に命令を下した。家来が八方に散った。島村は近くの諏訪神社の境内で、彼の友人五人と遊んでいた。

「弾丸をこしらえて来い」

彼は第二の命令を発してから松の木を降りた。家来は近くの工事場へ入って、コンクリートの粉を袋に入れて持って来た。それに水と砂利を加えて、適当な大きさの弾丸を作ると、岳彦が先頭になって諏訪神社の森へ出かけていった。

突然、コンクリートの弾丸を投げつけられて、たじたじとなったところに、岳彦が真先にあばれこんで、ものの見事に島村の額を引掻いた。

岳彦の通っている小学校に、軍曹という渾名の先生がいた。軍曹はかねてから岳彦に眼をつけていた。その軍曹が、やっつけられている島村を見てほって置くはずがなかった。

「こらっ！」

と軍曹の声がかかると、岳彦はぴょんと横とびに逃げて、すぐ近くの松の木に這い登った。前に一度、この軍曹に追いまわされて、結局はひっつかまって、大きな拳骨を貰ったことがあった。岳彦は、とても逃げられないと見て、木に登ったのである。

「猿め降りてこい」

と軍曹は木の下に来て怒鳴った。

「くやしかったらここまでおいでだ」

岳彦は木の上で赤んべえをやった。

「よし、降りて来なければ、この木を切ってやるぞ」

軍曹は彼のまわりに集まって来た少年に、誰か学校へ行って、小使さんから、鋸をかりて来いと言った。切るつもりはない、おどかしだったが岳彦には、それが利いた。

「降りればいいんだろう」

岳彦は木の上で言った。

「降りればいい、降りたら教員室へつれていってやる」

軍曹が言った。教員室につれていかれて、どんな目に会わされるか、だいたい想像はついていた。おそらく、こぶはひとつではすまないと思った。

岳彦はあきらめた。今日は運が悪いのだと思った。もう一メートルほどで軍曹の手のとどきそうなところまで降り

て来ると、ぽきっ、ぽきっと、指のふしを抜く音がした。軍曹は柔道三段だった。岳彦には、その音がひどく物騒な音に聞えた。これはへたをすると殴り殺されるかもしれないと思った。

岳彦は松の幹をくるっと廻って、軍曹の眼から姿をかくすと、すばやくズボンのボタンをはずした。

「どうした、早く降りて来ないか」

軍曹の顔が木の幹を廻ったとき、岳彦は、彼のかわいらしい小さな筒先を軍曹に向けて、水攻めを加えた。ぎゃっというような声がした。まさかと思っていた軍曹は、思わぬ奇襲を頭にかぶった。

岳彦はそのまますると木に登ると、手ごろの枝をつたわって、諏訪神社の屋根の方へ移動していった。枝が折れたら、そのまま庭に落ちそうな格好だったが、枝の先までいくと、足を木からはなして、ぶらりぶらりと反動をつけて、ぴょんと神社の屋根へとび移った。

「わあい」

とどこかで、彼の成功をはやす声がした。中尉だなと岳彦は思った。いいところで、声をかけて来たから、その功績によって、大尉に昇格させてもいいなと考えていた。

諏訪神社の屋根へ登ると、もう軍曹なんかこわくはなかった。彼はそこで、まず、彼の家の方へ眼をやった。彼の家は、一声呼べば聞えるほど近いところにあった。諏訪神社から南に向って細長い丘が続いていた。谷中の墓地がはっきり見えた。そのずっと先の上野の森の方にちらほらと花が見えた。

彼はそこで、兄達が歌っているのを聞きおぼえた湖畔の宿という流行歌を大声を上げて歌った。胸のいたみにたえかねてというところが気に入っていたから、そこだけを繰りかえした。胸のいたみにたえかねてという意味はよく分ってはいなかったが、そこが調子がいいから歌ったのである。

歌をうたいながら視線を手もとの方にひきよせると、日暮里の駅も見えるし、走っている省線電車（現在の国電）も見えた。

岳彦は屋根の上までもどした視線を諏訪神社の庭へやった。軍曹はもういなかった。岳彦の家来たちの姿も見えなかった。軍曹が大将のかわりにその家来たちを学校へつれていったのだと思った。人質に取られた家来を助けてやらねばならないと思ったが、いい思案は浮ばなかった。彼は眼を右側の崖下にある小学校の方へやった。思ったとおり、彼の家来は軍曹の捕虜になって、坂道をぞろぞろ降りていくところだった。

「逃げろ、逃げてしまえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

岳彦は屋根の上から力いっぱいの声で呼びかけたが、軍曹も家来もふりむかなかった。岳彦は家来たちに裏切られたように淋しかった。

屋根から降りなければならないと思った。いつまでも、こんなところにいて、神主にどやされるのはいやだった。彼は屋根を伝わって、もと来たところに来た。だが、屋根から松の枝にとびつくことはできなかった。こころみて見る必要もないほど、松の枝は高いところにあった。

岳彦は、どこか他に降りられるところはないかと、屋根のまわりを探した。下から梯子を掛けて貰わないかぎり、降りることはできそうもなかった。

岳彦は屋根の一番高いところへ戻って、腰をおろした。おれは大将なんだ、大将がこのくらいのことでべそを掻いてはいけないぞと自分に言って聞かせて、眼を上げると、西の空に真白く雪をいただいた富士山が見えた。

「富士山だ、富士山が見えるぞ」

岳彦は叫んだ。富士山が見えるのは、そこだけではなく、ここらあたり一帯の、高くて見透しのいいところ、たとえば二階の窓とか、木の上とか屋根の上からよく見えた。もともと、ここは道灌山と呼ばれていたところで、東京新展望八景の一つに数えられていたほど見晴らしのいいところであった。

岳彦が富士山を見たのはこのときがはじめてではなかった。何回か見ていたが、このときほど、富士山を見たという実感が身に迫って来たことはなかった。屋根の上に、取りのこされてひとりぼっちの彼を富士山が見ていてくれたことが彼を勇気づけた。

岳彦は、眼を富士山から北の方に廻した。山がずっと続いていた。頂に白いものが見える山もあったが、あまりに遠いので、山容は確然としてはいなかった。岳彦は、ふたたび、眼を富士山に戻すと、そこでじっとしていた。見れば見るほど美しい山だと思った。どうしてこんなに、まとまった形の山がそこにひょこんとあるのだろうと考えているうちに眠くなった。

兄の一郎が彼の友人達と、富士山へ登る話をしていたのを、聞くともなしに聞いていたことがあった。

「厳冬期の富士山の氷はかたい、それに突風がある」

「アンザイレンしたまま、五人が一度に死んだ例もある」

などと話していた言葉が断片的に思い浮んで来た。アンザイレンということが、なんのことか分らなかったが、そういう特別な用語は、奇妙に岳彦の脳裏にきざみこまれていた。

屋根の上で居眠りなんかして、おっこちたら大変だと考えないわけではなかったが、富士山を見ながら、兄達が冬

富士について話していたことを思い出していると、がまんできないほど眠くなった。富士山を見ているからだと思った。

富士山という山は眠りを誘う山だと思った。屋根の上に寝そべった。上には青空があった。春の微風が彼の頬を撫でた。彼は眼を閉じた。

夜になっても、岳彦が帰らないので、兄達が手分けして探した。岳彦が軍曹に追われて、松の木に登り、諏訪神社の屋根にとび移ったことまではすぐ分ったがその先が分らなかった。とにかく、神社の屋根を見てみようというわけで、近所の植木屋から長い梯子を借りて来て、神社の屋根に掛けて、兄達が屋根に上った。岳彦は屋根の上で眠っていた。

岳彦の父は商工省（通産省）に勤めていた。典型的に生まじめな官吏であった。趣味といえば、年に一度か二度、彼の友人達と山へ行くことぐらいのものであった。子供にはやさしくめったなことで怒ったことはなかった。母の菊子は漢学者の家系に生れていた。

母もまた父に似て子供をきつく叱るということがなかった。六人の男の子をかかえて大変だろうと近所の人がいっても、いいえ、二人も六人も同じことでございますと言った。

兄弟喧嘩をはじめても、菊子が間に入るということはめったになかった。知らんふりをしていて自然におさまるのを待った。多くの場合は、弟達の喧嘩の仲裁には兄が当った。長男の一郎が断然いばっていて、一郎だけが二階の一室を専有していて、弟達を入れなかった。その兄の一郎もこの年の春、大学を卒業して大阪の会社へ就職した。岳彦は、兄達とはあまり喧嘩をしなかった。弟の六郎もまた喧嘩の相手にはならなかった。

「へんねえ、外ではあんなに、暴れんぼうのくせに」

岳彦が家では意外とおとなしいのを見て近所の奥さんが言った。

神社の屋根の上で寝ていた岳彦が、兄達に連れられて家へ帰ったときだけは玄蔵はこわい顔をしていた。岳彦は父にてっきり叱られると思った。

「これから岳彦のことをサルヒコと呼んではならない。サルヒコなどと呼ぶから、サルのように木にばかり登りたがるのだ」

玄蔵は、岳彦を叱らずに力強い声で、岳彦の兄達を叱った。

「岳彦、お前のことをサルヒコなんて呼ぶ奴があったら、ぶんなぐってしまえ。お前は岳彦なのだ。猿彦ではなく岳彦なのだぞ」

玄蔵は岳彦が軍曹に小便をかけたことが悪いとか、コンクリートの弾丸を使ったのはけしからんとかいうことはひとことも言わなかった。喧嘩をやるなではなく、サルヒコと呼んだ奴はぶんなぐってしまえなどと、かえって喧嘩を奨励するようなことを言った。玄蔵は、岳彦が乱暴者になった原因の最大なるものは、サルヒコという渾名にあると思いこんでいるようだった。

この日を境として、竹井家では、サルヒコと呼ぶ者は少なくなっていった。それでも、兄達はときどきサルヒコと岳彦を呼んだ。そんなとき母の菊子は、眼で兄達を叱った。菊子の困ったような顔を見ていると、兄達はすぐサルヒコと呼ぶのをやめた。

小学校五年生になると、岳彦は前ほど暴れんぼうではなくなった。爪で相手を引掻くような喧嘩もやらなくなったし、家来に軍隊の序列を真似たような名称をつけてやることもなくなった。同じ暴れ方でも智能的になって来たのである。だが、相変らず餓鬼大将であることにはかわりはなかった。そのころ、岳彦は五年生全部を平定していた。彼に歯向って来る者はなかった。六年生でさえも、岳彦の存在に一目置いていた。

昭和十八年、岳彦は六年生になった。新学期を迎えて間もなく、岳彦の学校の先生だった軍曹が戦死したという話を聞いた。その先生は岳彦を松の木の上に追い上げた二、三日後に召集令状を受け取ったのである。岳彦の受持ちの先生も出征していった。学校は若い男の先生が眼に見えて少なくなり、女の先生が増えた。

軍曹の遺骨が白木の箱におさめられて、ずっと奥の台の上にあり、その向うに、軍服姿の軍曹の写真が飾ってあった。軍曹の学校葬はおごそかに進められていった。各組の代表が数人並んで前に出て、焼香した。岳彦も六年三組の代表のひとりとして英霊の前に出ていった。大人たちの顔はどの顔を見てもあまりにも緊張していた。大人たちが、そろいもそろってこれほど緊張している顔を見たことはなかった。岳彦は、みんなのやるとおり、焼香して、軍曹の写真に手を合わせた。

軍曹はびっくりしたような顔で、黒い額ぶちの中から岳彦を見ていた。多分、軍曹は写真を意識するとそういう顔になるのだろう。そのびっくりしたような軍曹の顔を見たとき岳彦は、あの時のことを思い出した。

岳彦の不意の攻撃を受けて、とびのいたときの軍曹の顔がそういう顔であった。あのときは、少々なりとも、岳彦の小便を、あの軍曹は浴びたのだ。そう思うと岳彦は急におかしさがこみ上げて来た。こらえてもこらえても駄目だった。岳彦は両手を口に当てて笑いをこらえた。だが、笑

いは、やはり笑いの変形として彼の口から洩れた。そこに居合せたすべての人の眼が岳彦をせめた。その大人達の滑稽なほど緊張した眼つきが、なおのことおかしくてならなかった。岳彦はとうとう笑い出した。笑い出すと止めようとしても止らなかった。岳彦は英霊の前で、くの字に身体を前傾させながら笑った。笑いをこらえるために、そういう格好になったのだが、他人が見ると、腹をかかえて笑った格好になった。

ガンという渾名の先生がいた。頭は真白で、そろそろ停年と思われる年齢だが、校長でも教頭でもなく、ひらの先生だった。身体が並はずれて大きかった。

ガンは大股で岳彦のところへ近づくと、いきなり、首玉をおさえた。声が出ないほど痛かった。岳彦の笑いが止った。すると、そのかわりのように、ずっとうしろの六年生の中から、突然、新しい笑い声が起った。二人の声であった。こらえた笑い方ではなく、げらげらと大胆に笑う笑い声であった。

ガンは、岳彦の首根っ子をおさえつけていた手を放すと、そっちの方へ向って歩いていった。

岳彦は、その笑った二人を知っていた。新学期からこの学校へ転校して来た、津沼春雄と田宮啓介であった。二人とも、岳彦の組ではなかったが新学期が始まって、ひと月と経たないうちに、新しいボスとしてにわかに勢力をひろげて来ていた。岳彦はその二人とはまだやり合ったことはなかった。いずれ、その勢力と対決しなければならないと思っていた矢先に、その二人の方から声をかけて来られたように岳彦には思われた。

軍曹の英霊の前で笑ったことは、動機はどうあれ、大変悪いことであった。学校一の悪い奴だと認定されてもやむを得なかった。しかし、岳彦等、悪童どもに取っては、それは一種の英雄的行為に見えた。岳彦が、軍曹の前で笑った瞬間、岳彦がこの小学校を制覇したのも同然であった。そのように岳彦も、彼の仲間たちも、考えていたときに新しい二人の勢力が突然現われたのである。

岳彦は、近いうちその新勢力をたたきのめしてやらねばならないと思った。

新聞にも、ラジオにも、勝ち戦のことしか載ってはいなかったが、戦は勝っているというのに物資はかなり窮屈になっていった。だが、岳彦には戦争の実感はまだ如実には湧いては来なかった。彼にとっては、未だに学校が戦いの場であった。

2

聯合艦隊司令長官山本五十六大将の戦死が公表されたの

は五月の二十一日であった。

岳彦の小学校の校長は全校生徒を集めて、山本五十六大将の話をしたあとで言った。

「これからは、いよいよ戦争はげきれつになるだろう。きみたちも、ただあんかんとして勉強していればいいというものではない。こどもにだってやろうと思えば、お国のためにつくすことがいくらでもある。家のお父さんやお母さんのお手伝いをすることもひっきょうは国のためになることだし、防空壕掘りの土運びをするのも、国のためになることだ。なにをすれば国のためになるかよく考えて見ることだ」

校長は漢語癖があった。興奮するとやたらに漢語を使う。その朝も、激烈、安閑、畢竟などという言葉を連発して壇をおりた。

山本大将が戦死したということは、子供ごころにも、暗いニュースとして映った。このままではいけないという気がしないではなかったが、さてなにをしていいか分らなかった。

竹井岳彦は、運動場の隅に家来達を集めて言った。

「おい、校長の話、聞いたろう。おれたちの仲間でも、なにか国のためになることをやろうじゃないか」

喧嘩ばかりしているのが能ではないと、岳彦を多少なりとも、銃後の子らしい気持にさせたのは、兄の一郎が出征して前線にいるからでもあった。

「そうだな、なにをしたらいいのかな」

家来の一人が言った。

四角い校庭の対角線の向う側に、津沼春雄のグループが、やはり竹井岳彦達のグループと同じように、丸い円を作って相談ごとをやっていた。岳彦は見るともなしにそっちを見て、津沼春雄をやっつけて置かないと、将来のことが心配だと思っていた。津沼春雄は転校して来たばかりなのに、既に六年一組のボスになっていた。

「おい、誰か斥候になって、春雄たちがなにを話しているか聞いて来い」

岳彦は命令を下した。すぐ、家来の一人が春雄たちのグループの方へ向った。岳彦がその斥候の進む方向に延ばした視線をちょっと上げると、道灌山の緑にかこまれた諏訪神社の屋根が見えた。

「おい、いいことに気がついたぞ。おれたちはみんなで、諏訪神社の庭の草取りをやろうじゃないか。草は今のうちに取って置かないと夏になるとこんなになるからな」

岳彦は、草の丈の高さを、手の平を上げて示してから、さて、諏訪神社の庭の草を取ることが、国のためになるかならないかを理屈づけようとした。諏訪神社は、もともと

軍神をまつった神様だから、近所から出征する人達や、出征した遺族の人達がさかんにお参りに来ていた。だから、その庭の草を取れば校長先生の言葉を借用すれば、畢竟国のためになるような気がした。

岳彦はその着想をすばらしいものだと思った。

「おい、見ろ。あいつがやられているぞ」

その声で視線をもとに戻すと、岳彦が出した斥候が津沼春雄のグループに取りかこまれてこづかれているところであった。

「ようし、行け」

岳彦はそう叫ぶと、勇躍してそっちへ向った。いままで、何度となく、春雄の組をやっつけようと企てたが、そのたびにうまいことかわされていた。今度こそは、という期待が岳彦にあった。この機会を逃したら、津沼春雄を家来にすることは永久にないような気がした。

岳彦が拳骨をかためて、なにか喚きながらつき進むと、校庭に遊んでいた子供達は道を開いた。

だが、岳彦が人の波をかきわけて、春雄たちのグループに近づいたときには、そこには喧嘩とは全然別なものがあった。

春雄は、斥候と肩を組んで、にこにこ笑いながら岳彦の方へ歩いて来るのである。岳彦は、ふりあげていた拳骨のやり場にこまった。

「竹井君、きみたちも、国のためになにかするつもりだろう。ぼくたちもなにかしようと考えているところだ。よかったら、一緒にやらせてくれないかな。ぼくたちは竹井君のいうとおりに動くよ。畢竟みんなが力を合わせた方が国のためになるからな」

春雄はペコンと一つ頭を下げた。これでは降参であった。でんから、降参すると言っている者をぶんなぐるのは武門の恥のように心得ていた岳彦は、

「おれの家来になるっていうことか」

と春雄を睨みつけると、

「そうだよ、この学校では畢竟竹井岳彦より強い者はないからね」

とお世辞を言った。

岳彦は悪い気持はしなかったが、春雄が、畢竟という言葉を連発するのが少々癪にさわっていた。

「おれは、神社の庭の草を取ろうと思っているのだ」

岳彦は諏訪神社の方をゆびさして言った。

「いつだ、それは」

「まだ決めてない。今度の日曜日にでもやろうかと思っているところだ」

岳彦は、どうだ、うまいことを考えついただろうという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.